

此頃小望遠鏡で面白い星 N K 生

○魚座16 赤星

赤經2時42.3分 赤緯北30°2'

ペガソス四角形の南側にあり淡い星の割には捜し易い星である。ハーヴェード光度は5.30等でスペクトル型はNである。肉眼星の中では最も赤い星で肉眼でも気がつく。望遠鏡では中倍率で美しい。双眼鏡で容易に見える星であるから注意されん事を望む。

○ M33N. G. C. 598渦状星雲

赤經1時29.3分 赤緯北30°15'

双眼鏡でも見え一時ならずつさよく見える。寫眞では甚だ立派であるが望遠鏡内では甚だ失望的なもので10時でも極く不明瞭なものである。直径は甚だ大で月よりは大きい3時では低倍率に限る。10時で立派に渦状に見える。

牡羊座 α

赤經4時31.3分 赤緯北16°21'

ヒアデス群中最大の星で Aldebaran と呼ばれる星で親しい星である。光度は1.06等スペクトル型はK5で赤星であるからオリオン座αの比較星として適當である。

此の星には位置角34°距離120秒の所に11.2等の小星がある。可なり明るい月夜にても3時で見える。3時の集光力の試験に試みて見なさい。此の星は黃道近くにあるからしばしば月の爲に掩蔽される。晝間でも4時で容易に観測出来る。

11等星はハーシエルが発見したものであるがβは1877年 Bearborn天文臺の18時で109°31'の所に13.5等星を発見した11等の方はアルデバランとは關係が無いが13等星はアルデバランと同方向に等速力動でいて居る。

○オリオン座 ε 二重星

赤經5時30.7分 赤緯北9°53'

3.7等: 5.6等 位置角45° 距離4.4''

黃對青の美しい重星で2時50倍で見える。3時80倍ではもつさ美しい。

○オリオン座 ζ

赤經5時36.7分 赤緯南1°58'

2.1等: 4.2等 位置角 156° 距離2.6''

2時の良好な試験星で2時100倍で見えるが光度の差が大きい爲に見にくい。伴星の色は珍しい色である。3時150倍では立派に二重に見える。W ハーシエルが此の星を見落して居るが Kunowsky が二重である事を発見した。伴星の位置には變化なし。

○N. G. C. 2024, Hv 28

オリオンζのすぐ北にある瓦斯星雲で随分大きなものであるがζの爲に見にくい。晴夜2時20倍で見えるが3時4時で見ると此の星雲には溝があり随分複雑なものである事が分かる。10時では仲々雄大な星雲である。ζの南にバーナード氏が寫眞的に発見した有名な暗黒星雲部がある。穴は7時や10時でも暗夜には漸く見得る位である機会あれば注意されよ。

○オリオン大星雲第二回 M52

赤經5時31.0分 赤緯南 5° 26'

一月號参照

小望遠鏡で見得る星雲でオリオン星雲は最も壮大で美しい星雲である。望遠鏡の発見以來幾多の研究が行われたがハーヴェード天文臺に於てボンド Bond がメルツ15時で行つた観測ジョンハーセルが18時反射鏡でケープに於て行つた観測等は有力なものである。観測者は巧妙なスケッチを畫いたけれども大體の點を現したものに過ぎぬ。現代の進歩せる有力なる反射望遠鏡の寫眞でさえ露出過度の爲め複雑なる中央部の構造星雲の美觀を現して居らない。寫眞の内ではリチー氏 G. W. Ritchey がヤーキース天文臺の24時反射鏡で得たものがよく此の星雲を現しては居るが望遠鏡内の美しさには居らない。四重星中の最小の星は BM オリオンと言はれる星で週期 6.4754日のアル・コール種變光星で私も二回ばかり減光して居るのを見た事がある。

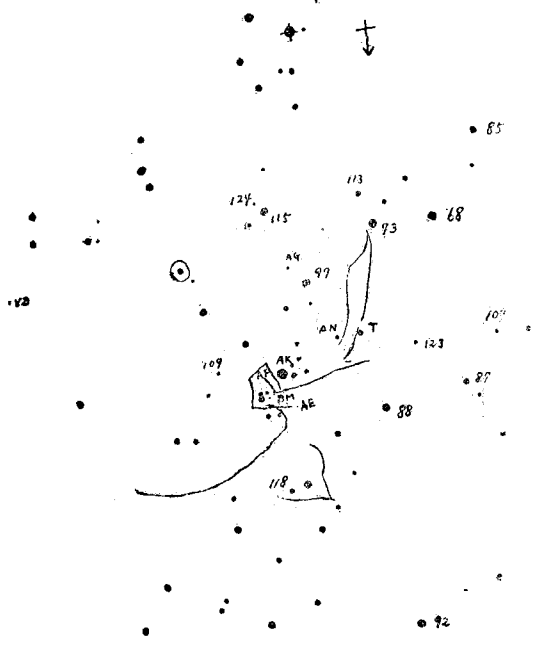
10.8等の星は3時で普通の夜に見えるが11.3等は可なり困難である。両星とも變光星と考へられて居る。

此の星雲の外には甚だ變光星が多い何れも淡いものばかりであつてハーヴァード天文臺及びウォルフ氏の發見である。其の内でも Tは1863年 Bond の發見した不規則星 あり。岡はホフメイスター及びハーゲン兩氏の原因圖に基いて書いたもので光度はハーヴァード光度表よりとつた。

A N はハーヴァード表には11.4等とされて居るがハルイウイヒの表には10.3—11.0等まで變光するが種類不明である。圖で BM は四重星の左下、右下は誤。

星名	變光寫眞光度	種類
AK	10.7等—11.3等	不明
AF	11.9—16.1	同
AE	12.6—13.3	同
AG	12.9—14.0	同
VZ	—	—

オリオン星雲



古き新星の最近狀況

古き新星の光度觀測は新星研究上重要なものであるが少數なる觀測が得られるのみにて一般に等閑視されて居る。

英のステアプンソン W. H. Steavenson (六吋レイ望遠鏡) 氏ヤークス天文臺のバーナード氏 (四十吋) A A V S O 會員等の觀測が主要なるものである。ステアプンソンの觀測を主要なるものとして記す。

- 1866年北冠座新星
9.4等の光度を保持す。
- 1848年蛇遺座新星
1922年中11.9乃至12.7等の間に稍々週期的に變光す 1918年鷲座新星1922年中は殆んど變りせず10.1等なれど 1923年に10.4等近くまで落下せり。可なり著しき星雲狀星像を有する爲觀測は多少不一致なり。2時にて觀測可能。

- 1919年蛇遺座新星
AAVSO 會員の觀測によれば1922年中12.0等より12.8等まで下降す。
- 1920年白鳥座新星
1922年中10.0等より11.2等まで漸次に下降し1923年10月には11.5等なり。星像星雲狀なる爲に光度決定にて著しき困難を感じ著しく不一致なり。3時にて觀測可能。

- 1876年白鳥座新星
光度約14.7等にて6時にては最良の夜に於てのみ認め得。變光は僅かに0.3等以内にてマナー教授は41.5日の週期を喫ふ。
- 1910年トカゲ座新星
認め得べき變化なく14.1等なり
- 1901年ペルセウス座新星
12.2等より14.1等の間に著しき變光をなし星像は僅かに73倍にて著しき星雲狀の外觀を有し觀測多少困難なり7時にて容易に觀測さる。

訂正

一月號天界口繪のクロスレー反射望遠鏡の説明中36時鏡はカルバーの製作なりと記すがキラー氏の原文には It Was made by Mr. Calver と記し其後 Campbell 氏により天體物理學雜誌1902年號により訂正さる。

反射鏡面が不完全なりし爲有名なるクラップ氏 Sir Howard Grubb をして再度拋物鏡面に磨かしたる故クラップ氏の製作と同様なりと。又鏡面は甚だ完全にしてフーコーの鏡の試験によれば鏡面は甚だ良好なり。以上の理由により訂正す。